
張飛異聞伝

かいひろし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

張飛異聞伝

【Nコード】

N9317N

【作者名】

かいひろし

【あらすじ】

暗殺を、盟友に救われた張飛が繰り広げる三国志の物語。関羽の死により、酒と兵卒への暴力が増えていた張飛は、関羽の諫めによって心が変わって行く。

張飛の変化

静まりかえる闇夜の中、赤い月が下界を見下ろしている。ほのかな灯を放った部屋では、酒に酔った大男が、大いびきをかいて寝ているのがわかる。

辺りは、夜の静けさに満ちていて、月明かりが灯となって僅かな光りを地上に放っていた。

それから、どれくらいの間が過ぎ去ったのか、大男はまだ静かな夢の中、時折大きく寝返りを打っている。

その寢所に、静かに近づくと怪しい二人の男がいた。

彼らは何か、ひそひそと話しをしている。

たび重なる、主の暴力に耐えかね、堪忍袋かんじんぶくろを切らした輩は男に恨みの刃を浴びせようとしていた。

「奴を、今晚殺しちまおうぜ……」

「ああ、日頃の恨みを、今夜晴らしてやる！」

大男の寢所の中に、そつと忍び込もうとした時である。

近くに、何かいる気配に、二人の男は気がついた。

その部屋の奥に大きな人影が潜んでいるのが、なんとも不気味である。その男は、こちらに近づいてきた。

それを見るなり男たちは、恐ろしくなり震えあがった。長い髭をたくわえた、大男が立っていたからだ。

男はこちらに、どんどん近づいてくる。男たちは、その近づくと大男に見覚えがあった。

「あつ……」と、ひとりの男が驚愕の声をあげる。

髭をたくわえた大男が、その男たちに向かって怒鳴るように言う。「貴様らは、ここで何をしているのだ！」

立っている男は、赤ら顔の髭をたくわえた緯丈夫な男である。

それは先日、呉の呂蒙の策略で、麦城ばくじょうで非業の死を遂げた関羽雲

長であつた。関羽は亡霊となり、二人の男の前に現れたのである。

「貴様らには、張飛は、殺させぬぞ！」

その声を聞いた、寝ている大男がすかさず飛び起きた。

「兄貴ではないか！」

「どうして、ここにいるんだ！」

その男は、張飛翼徳という。蜀の車騎將軍である。彼は、頼にたくさんの涙を浮かべて泣いている。関羽とは、あの桃園の誓いを交わして以来、義兄弟の契りを結んだ仲であつた。

「張飛よ、わしは傲慢で剛毅のために、命を落としてしまった」

関羽は、淡々と語りだした。

「今、荒れているお前の事が、心から心配なのだ」

「いいか、張飛！ 己を悔い改めなければ、命はないと思え」

「そこにいる、お前らも立つてないで、こちらに來い！」

関羽は、男たちを手招きして呼び寄せた。二人は先日、張飛に傷めつけられた、張達と范疆はんきやうである。

関羽の甲い合戦のために、白い装束を用意することで、張飛を怒らせ木に括りつけられて、鞭で死ぬくらい打たれていたのである。

「わかりました」

震えながら、こちらに歩み寄る張達と范疆がいる。

史実上の張飛は、知識人を敬愛したが、学問のない兵卒などには情け容赦ない態度で接している。劉備はいつも、張飛に注意していた。

「お前は、刑罰で人を殺しすぎている」

「それに日々、兵卒を鞭でたたき、それらを自分の身边においている。」

「これは、災いを招く道だぞ！」と、日々戒めていた。

それでも、張飛は自分を省みないために配下の將の張達、范疆に暗殺されてしまう。

ちょうど張達と范疆は、今夜の寝静まった頃に、張飛の暗殺を実

行するところであつた。そこへ、関羽の亡霊が現われて、その暗殺を阻止しようとしたのである。

驚いたのは、張達と范疆である。身の凍る思いをしたのは、当然であつたろう。すこぶる恐怖にふるえ、関羽のただならぬ怒りに満ちた顔を見た。そして、張達と范疆は完全に戦意を喪失している。言われるままに、関羽の亡霊にしたがう兩人であつた。それほど恐ろしいものであつたのだらう。

張達と范疆は、さらに関羽に近づいていく。それを見た、張飛が顔色を変えた……。

「お前たちは！ 張達、范疆！」

「申し訳ありません。張飛様を殺そうとしていました」

関羽がそれを見て、ささやく。

「部下を大事にせんと、いつかは殺されるぞ。張飛！」

「今、お前までもが死んだら、劉備様はどうするのだ？」

「あまりにも、配下に敵しすぎるではないか」

その言葉を聞いた、張飛は大声をあげて床に伏せて泣き叫んだ。

「うおーっ！」

「兄貴、わしは、わしは、間違つておつたぞ！」

「申し訳ない。張達、范疆、わしが悪かつた。許してくれるか？」

泣きながら謝る、その姿は今までの張飛とは違つていた。

「すまん、明日の朝方。わしは、皆に謝罪するぞ！」

「張達、范疆、朝に皆を集めてまいれ。頼んだぞ！」

「わかりました、張飛様がそうおっしゃるならば」

「われら、恨みごとは水に流し。お仕えさせていただきます」

そういつと、彼らは納得して。張達と、范疆はその場を静かに立ち去つた。

暗い闇が過ぎ去り、間もなく夜が明けようとしていた。

「よいか、張飛よ。今日の事は決して忘れてはならんぞ！」

「今、劉備様は私情から冷静さを欠いておる。お前が冷静になり助けるのだ」

「いざという時は、後詰めは張飛！ お前しかいない！」

「必ず、肝に銘じるのだ！ もう間もなく朝が来る、済まぬがこれでさらばだ！」

「兄貴、もう行ってしまふのか！」

張飛は寂しげに、茫然とそこに座りこんだ。その場所には、関羽と共に命を落とした、関平と周倉が立っている。関羽らは、張飛に挨拶をすませると、その場から消え去って行った。

辺りは、朝露にまみれ光輝く日差しが立ち込みはじめている。

「わしは、心に銘じて劉備さまを助けなければならぬ！」

涙をながした張飛は、関羽が消えさった場所に立ち尽くす。

「兄貴、見ていてくれよ！ 俺は変わるぞ！」

時に、二二一年。巴西郡の治所？中（四川省？中）での出来事であった。

辺りを霧がつつむ中、陣中では、張飛の軍が整列している。

「張達さまと、范疆さまが、われらを集めたみたいだぜ！」

陣中では、ひそひそ話しが始まっている。

「今日も、張飛様に、こつ酷くやられるのかな？」と、兵隊たちは、皆怯えている。

「静まれ！」と、范疆が一声かけた。やたらと、落ち着いている張達と范疆をみて、兵士たちは驚いていた。

そこへ、雰囲気のみで違う張飛が、兵卒の前にあらわれる。

「早くから、良く集まってくれた。お礼を申す！」

まるで、別人の張飛をみて兵士たちは驚く者が多い。

「なんか、おかしいぞ！」と、兵士たちは、顔を見合わせ、ただ驚いている様子が窺える。

「今日から、この張飛は変わると宣言する。心を改め、粗暴な俺から、配下を大事にする俺に、変わろうと思うのだ」

「今までの事は、申し訳ないと心から反省しておる！」

兵卒たちは、驚きと安堵感にどよめいていた。張飛の言葉を聞いて、一番安心しているのは張達と范疆だった。朝早くから、始まった張飛の異変には誰もが驚いていた。

この前年に、蜀の参謀であつた法正が四十五歳の若さでこの世を旅立っている。もし、生きていれば、さぞかし驚いたことであろう。心の中で張飛は、法正の事を思い出していた。

「皆のもの、これからが大事である。精進して蜀のために働いてくれ！」

その張飛らしからぬ、言葉に戸惑いつつも、兵士たちは声を出していた。

「おおーっ、張飛さま。万歳！」

「これで、解散する。持ち場につくがよい！」

晴れやかに朝の集会は幕をとじた。それを、涙ながらに見つめる男がいた。何を隠そう、張飛の倅、張苞であつた。

「親父、どうしたんだろう？ 人が変わったようだ」

張飛がそれを見つけて歩み寄る。

「おおっ、張苞ではないか！」

「親父、なんか違うな？」

張飛は、昨晩の出来事を張苞に言つて聞かせた。

「そうでしたか。なるほど、関羽さまが現れたのですか」

本来、張飛は直情径行型の武將で部下を非常に可愛がつたが、同時にこれを罰することも厳しかった。これが、史実で命を早めた結果である。

天下の情勢は、前年にあの曹操が正月に世を去り。子の曹丕が受

継いでいた。十月には、曹丕が献帝の禅譲を受けている。

蜀側でも、先に述べたように法正が亡くなっている。この年には、劉備が帝位につき蜀漢が生まれている。

史実では、この翌年の二月、劉備が関羽の報復のため、呉に出兵し六月に夷陵にて大敗する事になるのだが。

七月に暗殺をまぬがれた張飛は、酒はわずかに我慢するようになり。兵卒に、八つ当たりする事も控えるようになり、信用も得ている。

彼は？中を、ひそかに経ち、江州にいる劉備と合流すべく軍を進めていた。この中には、都督の呉班や武將の張達や范疆もいた。

「張飛さまは、お変わりになられた。昔から配下思いではいるが、罰が厳しすぎたからな！」

張飛の様子を遠目に見ながら、呉班が意味ありげに呟いた。

江州（今の重慶）へむけて出立した張飛軍は、およそ一万あまりの軍勢である。劉備と合流すべく街道を東進中であつた。

「皆のもの、この張飛に続くがよい！」

隊列が、乱れぬ隙のない行軍であることは、張飛の訓練のたわものである。

そのころ、江州に駐留している劉備の陣に、趙雲がおとずれていた。趙雲は、正面切つて劉備を諫めに来たのである。

「敵は曹操であつて孫権ではありません。さきに魏を滅ぼせば、孫権は自ずと服従します」

「いま曹操は死んだとはいえ、息子の曹丕が篡奪をはたらいております。人々の心に沿つて、はやく関中を手中に収め、逆賊曹丕を討つべきです！」

しかし、はやる劉備はまったく受けつけなかった。怒りが平常心を失つていた。

こんなとき、いつも能弁によつて巧みに劉備を説き伏せた。蜀

攻略の功労者法正はこの直前にすでに死去しており、もはや劉備を抑えることのできる者はいない。

蜀に留まっていた諸葛亮は、劉備の心情を理解していた。予想していた諸葛亮は、張飛に一通の書状を急いで馬良に託してやった。事は風雲急を告げている。

そのころ、劉備が荊州に攻め入る情報を聞きいれた呉では、諸葛亮の兄である諸葛瑾が、和平交渉のため長江を西上していた。

「うむ、劉備殿は聞きいれるかどうか。孫権様の御指示じゃが？」
それに伴う、顧雍が意見を伝えた。

「関羽を兄と慕う、張飛のほうが悪く思うのだが？」

「それは、言える。されど、頭の弱い張飛は恐れるに足らんような気はするが。」

「この交渉は、上手くいかんだろうな！」

諸葛瑾は、長江を意味ありげに遡る。

呉には、関羽を策略で葬った、頼りになる呂蒙は病死して、この世にはいない。噂では、狂い死にしたともいわれている。

今は新参者の陸遜が呉の軍事を統括している。陸遜は？ 帰城を守備している。そのほか李異、劉阿は巫城を守備中である。

呉では、曹魏に上辺だけ臣従する姿勢をとり、蜀との決戦を覚悟していた。恐らく、蜀軍の勢いが物凄いことが予想できることを陸遜は感じている。

道中を急ぐ張飛は、江州で劉備と合流することになる。張飛は書状を馬良から渡されていて、その内容をしかと肝に命じていた。

張飛は、劉備のいる所へ急ぐ。

「兄じゃ、張飛にござる。面会を願い申す」

「おおつ、張飛。間に合ったか！」

劉備は、張飛を目の当たりにして驚いた。それは、普段と違う張

飛がそこにいたからだ。

「どうしたのだ、張飛！」

あまりの様変わりに、諸将も驚いている。

「如何なさいましたのじゃ、張飛殿！」

驚いた趙雲が駆け寄る。無理はない、粗暴な張飛の影は潜めて。ただ実直な張飛がそこにいる。

「わしは、亡くなられた兄者に諫められております」

「兄者が、亡霊となって、この張飛の前に現われましてございます」

あまりの、張飛の真剣な面持ちは周りを圧倒した。その表情は、鬼神の如くで凄味が増している。

「まことなのか、張飛！」

「まことでございます。劉兄者！」

その雰囲気から、ただならぬ覚悟が満ちている。関羽の仇を晴らすために、劉備のいる江州では早くも評議が開かれている。

「関羽の弔い合戦である。われらは、これより進攻する！」

「陣立てを、発表する」

第一陣、張飛！兵力一万五千。副将、呉班。

第二陣、馮習！兵力一万。副将、張南。

第三陣、黄権！兵力一万。副将、張嶷。

「私自身が、本体！ 四万を率いる。なお、今回は老いた老兵は期待しておらん！」

それを聞いた、今年、七十五才の黄忠はすこぶる面白くないようだ。

「劉備様、待つてくだされ。なぜこの私目を外すのじゃ！」

「ぜひとも、一陣にお加えくだされ！」

黄忠の剣幕に劉備もたじろいだ。老兵ならずも、この一戦には彼なりに意味があったのだ。

「仕方がないのう、黄忠には兵五千を与える」

「はっ、有りがたき幸せ。ええい、腕がなるぞ！」

黄忠は、身震いしながら年老いた身体を鞭打っていた。

「すまぬが、趙雲！ お主は江州の留守居を頼む！」

劉備は忠告されたのが気にいらぬようである。私情とはいえ、決意の固いことは動くことはなかった。

そこへ白装束の、いで立ちの若武者が入ってきた。その凛々しい若武者は、あの関羽の二男の関興であった。

関興は、父・関羽とともに樊城攻めに出陣していたが、戦果を報告するために戦列を離れていたので難を逃れていたのである。

「この関興を、父の弔い合戦にお加えください！」

関興は鎧から、すべての物を白に統一していた。張飛が言う。

「ぜひとも、わが軍に加え父君の仇をとらせてくださいませ！」

「よし、分かった。関興を、張飛に預けることにしよう」

それを見た、劉備は涙ながらに語った。

「はあつ、有りがたき幸せ」

関興は、父と別れる際の場面を思いだしていた。もはや父の関羽はいない、その思いは深く胸に刻まれている。

「関興よ、劉備様に樊城攻めの戦果を報告に行くのだ。まもなく樊城は、この関羽が落とす」

「劉備様が、喜ぶ顔を見たいものじゃ」

「ははははっ！」

「はい、わかりました」

これが、父。関羽との最後の会話である。

「必ず父の仇は、この関興がとる！」

関興は固い決意を、心に決めていた。

その静寂の中、呉からの使者。諸葛瑾が江州にたどりついた。劉備は、拒絶する方向を示すが、黄権が出て意見を伝えた。

「お会いにならずに、追い返しては敵に狭量と見られます。むしろ

彼を通し、こちらの言い分を告げて、お帰しあるならば、戦の名分も立ちましよう」

劉備は、諸葛瑾を通した。瑾はひれ伏し、呉の使者として云う。

「我が弟の亮は、陛下に臣従し蜀にあります。故に、陛下のご眷顧も仰がれようかと、勤を使いとして、呉の衷心を申し上げる次第でございます」

「簡単に聞く、使いの主旨は、如何なることか？」

諸葛瑾は、続けて云う。

「ご了解を仰ぎたい儀は、関羽様の死のことです。呉は、蜀に対して何のお怨みもございません」

「呉の呂蒙と、不和を招き、ついに非業の死を迎えることになりました。実にこの件は、主人の孫権も遺憾としているところです」

「魏の圧力さえなければ……」

劉備は、諸葛瑾の話を制し、形相を変え言い放った。

「もうよい、大義であった。呉へ帰り、孫権に言うがよい！」

「朕は、誓って呉を許さない。これなるうちは、一戦交えんと！」

交渉は、むなしくも劉備が拒絶したために決裂に終わる。諸葛瑾は蜀を離れる。その思いは、交渉が憚らなかったことに、虚しさを感じている。

「やはり、無駄であったか。致し方あるまい」

無念そうに、諸葛瑾が心中を顧雍に呟いている。温厚なる劉備がここまで言い放ったためしはなかった。

「これは、駄目だ！」

「決定的ですな、もう名將の呂蒙はこの世にはおりませんし」

「若造の陸遜は、どう対処するのでしょうか？」

「蜀の対戦一途は、防ぎ様がありますまい！」

「心配でございますな、まったく！」

目的を果たせない、諸葛瑾と顧雍は船上で呟いていた。

「早いとこ、呉に戻らねばならないな」

長江を下り、呉への帰路を急ぐ文官の兩名が、蜀の地を遠くから眺めていた。

劉備は、必ず呉に侵攻するであろう。そのただならぬ、雰囲気を目の当たりにした諸葛瑾は腕組みをしている。

まだ、建業ははるか向こうである。諸葛瑾は、弟の諸葛亮に会えなかったのが気がかりであった。

「こうなれば、弟とも会わず仕舞いか」

複雑な思いが、諸葛瑾の胸の中には生まれている。先日、来た蜀の山々を見渡しながら、彼はどのように感じたのか。

夷陵の戦いが、起こるまで秒読みであり、蜀と呉の戦いの火蓋が切られるのは必至である。

つづく。

序盤戦

風雲、急を告げる頃。呉では、魏への交渉をするべく趙咨ちようしというものが、使節として魏に赴くため出発していた。

趙咨は、南陽の人である。博聞多識であり、人との受け答えが巧みであった。

「呉国が、使節をよこして、臣従を示しに参ったというのか!」

「ほう、これで呉も我が手中と言えよう」

魏皇帝曹丕は、不敵な笑みを浮かべている。彼は、趙咨に謁見の機会を与える。趙咨を見くびり、談笑しながら言葉を発した。

「使節の者に、問うてみたいが、呉の孫権なる人物はどのような御仁か?」

趙咨は、微動だにせず、昏々と語りだす。

「我が、主君孫権は、聡明叡智の人なり」

「その実力は古の名君にも劣らず」

曹丕は、趙咨を覗いながら再び訊ねた。

「朕は、状況において、呉を討たんと心得ておる!」

「呉次第では、如何なるものか?」

威嚇せんとする、曹丕の態度にうろたえることもなく。趙咨は、

相手を呑み込んだように平然と口をひらく。

「それも、結構でございます」

「外征をする勢力があるようなら、小国の呉にも受ける覚悟はございます!」

「呉の将兵は、心意気をもって恐れず」

少しも、気落ちすることもなく、魏皇帝の曹丕と堂々と渡り合っ

た。その態度は、魏の群臣たちをも圧倒した。

魏帝曹丕は、趙咨を見つめる。その大胆不敵な、使節の男を見くびったと思っている。

「そうか、呉は魏を怖れてはいないというか？」

趙咨は、魏帝曹丕に臆せぬように答えた。

「すこぶる怖れてもいませんが、侮るわけでもないのです」

「呉の精兵百万、つねに呉を全力で守備するのみでございます」

曹丕は、心のうちで趙咨に舌を巻いた。彼は、感心して趙咨に酒を与える。

「うっん、さすがは呉の使節なり」

「君命を辱めずに、よく言うたものである。格別に褒めてつかわす」

魏国皇帝曹丕は、使節の帰国に将来の援助を約束して、呉王孫権には九錫の栄誉を加えて、？貞に印綬を授け、呉へ赴かせた。こうして、使節としての趙咨の仕事は終わる。

趙咨の帰った魏では、群臣達がこぞつていう。

「あの趙咨という者に、一杯食わされてしまった！」

この千載一遇の魏の好機を、むざむざと逃してしまったような、呉の外交であった。

劉曄は顔面を赤らめて、魏帝曹丕に上奏する。

「この絶対好機を逃したからには、呉へ味方すると見せかけ呉の内
部を攪乱させて、一方では蜀を討つ方針をめぐらしますように」

議論はめぐるが、最後に曹丕が言い放っている。

「まあ、しばらくは静観しておる。朕は、呉も助けず。両者が戦つて力尽きるのを待つのみじゃ！」

一同は、言葉もなく曹丕の方針に従った。

その頃、蜀の馬良は、異民族の懐柔工作ため南蛮へ急いでいた。護衛には、諸葛亮の指示で張飛が役目を担っている。

この頃の南蛮族の王の沙摩柯は、自らをペルシャの王と自称し、南蛮に勢力を保っていた。その沙摩柯を味方に付けるべく、馬良は一命を賭けて交渉するつもりで南蛮へやってきた。

「蜀の馬良なる人物が、王に面会を求めに來ております！」

「よし、通すがよい！」と、斬ばらの頭で、裸足の出で立ちの沙摩柯は身を乗り出した。

「蜀の馬良と申します。この度は、王にお話があつてきた所存でございます」

「よくぞ、遙々来られた」

沙摩柯は、馬良に敬意を表し迎えた。

「まずは、蜀からの贈り物を献上致します」

諸葛亮の指示で、土産物を持参してきている。張飛が、それを差し出す。

「おおつ、これは素晴らしい品物である！」

土産を手にとり、沙摩柯がなにやら喜んでいる。

「この度の、ご用件は如何なるものか？」

沙摩柯は、事の真相を確かめようとした。

「王も、承知かと存じますが。蜀は呉に攻め込む覚悟でございます」

馬良は、沙摩柯の様子を覗いつつ話す。

「このわしに、味方になれと申すか！」

「聞けば、いまは亡き、関羽殿の仇討ちと聞いておる」

蜀の情勢は、南蛮の沙摩柯にも聞こえていた。

「さようで、まさにその通り。関羽様の仇討ちに呉へ攻め入ります」

「私情の闘いとは、このことよ。味方して利はあるのか！」

沙摩柯は、馬良に条件等を問いただした。

「勝利の暁には、王の領土を確保すると約束します。」

張飛が、鋭い目でにらみを効かせている。

「あい、分かった。出陣を約束しよう！」

沙摩柯は、断る雰囲気でない張飛の様子を覗っていた。それに、関羽の生前の人柄にも恩義があつた。無事に援軍の交渉は、馬良によつて成功をみせることになる。

「これで、我が仕事も無事に終わることができた」

馬良は、しかるべく功績を胸に蜀へ急いだ。沙摩柯は数万を引き連れ、劉備のいる白帝城を目指し進んでいる。それに続くは、沙摩

柯の声で参戦する銘々である。

蜀軍は巴東郡はとうぐんの白帝城に大軍を駐屯させていた。あえて動かずに鋭気を養っている。

さて、白帝城の由来であるが、かつて新末後漢初の群雄公孫述がこの地に築いた城が白帝城と呼ばれたことが由来である。後に永安宮と呼ばれるようになる。

これは、劉備が後につける名称である。現在は、三峡ダムの完成によって長江に浮かぶ孤島になっている。

その時、呉に潜入していた間者から一通の諜報が入る。

「呉は魏へ急遽援軍を求めましたが、魏はただ呉王の称号を与え、曹丕の態度は中立で保っています！」

劉備は、感情的になっている。先日さきの関羽の仇を、討つことだけが念頭にある。劉備は、諜報を聞いて一層よろこんだ。

「我はこれより呉に出兵する。時は今である！」

南蛮王の沙摩柯の数万の兵、涪溪の漢将杜路、劉寧の援軍を加えて蜀の軍勢は強大化している。

張飛は援軍の功労者の馬良と話している。

「さしもの、よくぞこれだけ集まったものじゃ」

「この戦は、留守居で孔明殿がおりませぬ。それゆえ、私目に書状を認めておりました」

「されど、馬良殿。この戦は、進行するには有利ですが、退却するには不利と思いませんか？」

今の、劉備には退却という方策が欠如している。そのことに、張飛は注目していた。

「蜀軍来る！」の報を聞き、呉ではざわめき浮足だっている。孫権は呉王には登ったものの、魏からは援軍が来ない状態である。それ

と快進撃を続ける蜀軍は、巫城と？帰城をあっという間に攻略している。

「蜀軍はおびただしい数である。どうしたものか？」

文武の幕僚に問いかけたが、静まり返った状態であるのに対し、孫権は溜め息を吐いて呟いた。

「呉の諸将は、数はいるものの、我こそはという者は少ない」

「然したる時は、周瑜がおったが今は無く、魯肅と呂蒙もない。我が心の頼りになる者はおらぬのか？」

その様子を、見ている青年があつた。若干、二十五歳になつた若武者の孫桓であつた。孫桓は、孫策の旗揚げの際の立役者、孫河の三男である。

「私はまだ、未熟者ではございますが、日ごろの兵学の精進、武力の鍛錬を怠りません。君よ、どうか私を派遣して下さい！」

孫桓の必死な、哀願は孫権の心を打つことになる。孫権の甥にあたる、この若武者には気概があつた。

「聞けば、そちの家には、子飼いの勇将の李異と謝旌がおると聞く」

「おおいに暴れて参るがよい」

「副将には、老練な虎威將軍の朱然をつけてやる、安心して暴れて参れ！」

呉からの先陣、孫桓率いる、五万の兵は蜀の進行を防ぐべく出陣していく。その半分を、朱然が指揮していた。

ともあれ呉軍の先陣は、宜都（湖北省・宜都）まで進出する。

迎え討つは、張飛の率いる先陣である。一糸乱れぬ、隙の無さに歴戦の勇士たる風格が満ち溢れている。両軍は、宜都で初めて相対峙することになる。

「それがし、孫桓と戦いたいと思います」

張飛が見れば、白装束の関興が控えている。彼は、全身から漲る気迫が溢れている。それを見ている、張苞も気にかかった。

「さしたる敵には、強者もある。それがしの倅、張苞も伴うがよい

！」

「ありがたき、幸せ！ 存分に暴れて参ります」

関興は、張苞を伴って出陣していく。砂煙をたて勇ましく出る様は、どこか無き関羽を彷彿させていた。その後に、ピタリとついた張苞が馬を走らせていた。

関興は、凄まじい勢いで孫桓の陣を蹂躪する。孫桓の軍の倍近くはあるからたまらない。

「我こそは、関羽が忘れ形見の関興なり！」

孫桓は、二拾合ほど撃ち合うが、たまらずと思ひ逃げ出した。腕には、負傷の跡が見える。

危険と思ったのか、謝旌が助成に入る。

「我こそは、孫桓様の配下の謝旌なり！」

謝旌は必死に闘い、孫桓を救いだすことに成功する。

「くわつ、謝旌という者、つわものぞ！」

関興が、声をあげた。

「わしにも、戦わせろ！」

張苞が、意気良いく駆け込んでくる。孫桓を、追い詰めようとしていた。

「我が主、孫桓様をお守りするのだ！」

また危ういところを、もう一人の配下の李異に救われた。

「くわつ！ おのれ、蜀の奴等め！」

孫桓は、悔しさで唇を噛んでいる。

「我が配下は、獅子奮迅の闘いぶりである」

孫桓は、なおも逃げようとする、関興と張苞が取って返し、深追いしようとする。

「関興、張苞！ 気持はわかるが、深追いするではないぞ！」

冷静に関興と、張苞を止めたのは誰であろう。まだ、序盤の闘いを冷静に見ていた張飛であった。

初陣を負け戦で、飾った孫桓はすこぶる面白くない。陣容を立て直す必要があつた。呉の先陣は蜀の攻撃が凄まじいことを、体感していた。副将の朱然が、体制を立て直すべく、諸將を集める。

「蜀軍は、勢い余つておる！　ここは防御を固めるべきだ」

孫桓は、朱然の言葉を聞き入れ、陣の補強にかかるように兵卒に命じる。朱然は、自らが率いる無傷の水軍を要している。

孫桓は、陣容を一步退き布陣し始めた。

張飛の陣では、諸將があつまり軍義が開かれていた。

「呉の孫桓は、一步引いて布陣し始めた！」

「どう思つか！　意見のある者は云うがよし」

一同の意見は、同じであつた。

「先と同じ、怒涛の攻めは通用しない」

「策を設けるべき！」と、言う声が多かつた。

孔明からの書状が、ここで張飛により開かれる。

（一の策、敵が引いて構えし時なるは、むやみに強攻せず罨を用いて敵動きし時に、攻撃を加えよ。）

張飛の陣営では、馮習の案で間者をわざと潜り込ませる方針で固まつた。

間者は、わざと捕まり呉へ情報を流す。朱然は疑つたが、こと備えあれば万全と思ひ、孫桓に書状をしたためた。

（敵の夜襲が、あるやもしれぬ。十分にご警戒を！）

（孫桓様と、しめし合わせ挟み打ちに致しましょう）

しかし、この書状を届けようとした者は、待ち伏せていた蜀の兵に捕まってしまう。

「まんまと、掛かりおつた！」

張飛は、諸葛亮の策があつた事を確信している。

呉の朱然は、船から降りて陸路を進もうとしたが、大将の崔禹と

いう者に止められた。

「どうも、すこしおかしいような気がします」

「都督殿は、船を離れて事を起こすのは、軽率すぎます」

「それがしが参ります」

崔禹は、軍勢を率い、朱然の取ろうとした方針を遂行しようとしている。

崔禹は、朱然の言った作戦を遂行するべく、山間部に差し掛かったところを、伏兵の関興と張苞に襲撃された。

「やはり罠であったか！」

刃を交えて、二拾合ほど撃ち合う。崔禹は、危ういと思い逃げ出すが待ち構えていたのは張飛であった。

「責様を、逃がす訳にはいかん！」

張飛の怒声が、戦場に木霊したと思うと、崔禹は逃げる隙もなく首が飛んでいた。張飛の攻撃は、見事というより他はない。

「崔禹様が、打ちとられました！」と、朱然の陣営に聞こえてきたのは、夜襲が始まる前であった。

「すまん、崔禹殿！ わしの身代わりにしてしまった」

朱然は、崔禹が戦場に出ていく姿を思い浮かべている。

しばらくして、孫桓の陣から火の手が上がると、呉軍は浮足立つように崩れ始めた。完膚なきまでに叩きのめされ、一度ならずも、二度までも敗戦の憂き目をみた。

「おのれ、蜀のやつらめ！」

「一度ならずも、二度までもやられるとは」

命からがら逃げる孫桓には、謝旌と李異が両翼として従っている。殿が御無事であれば、再起はできます」

謝旌が、うろたえながら歩く孫桓を支えている。朱然は、船出の総勢を五十里ほど下流に引き下げてしまった。

孫桓は、夷陵の城まで退却してゆく。その後ろ姿には、悔しさがにじみ出ていた。

呉の本営では、驚愕の声があがっている。

「とても、防ぎきれない状態ではない！」

魏の援軍は、あてにならない状態である現実には、孫権を苦しめている。

「孫桓が、軽くあしらわれるとは、蜀の勢いは止まらぬのか！」

焦りの色が、覗える様子に文官たちは、どよめいている様子であった。

つづく。

黄忠の死

夷陵には、冬がきた。雪がちらつき、身も凍るような寒さであった。将兵は休息をいれ、戦線は膠着状態となる。

連戦連勝の蜀は、占領したる巫峡ふきよう、？しき帰城を維持し、章武二年の正月を迎えている。

そして蜀の陣営では、幸先よく勝ち戦をした劉備が、すこぶる上機嫌で陣内で祝勝会を施している。

「劉備殿、まずは先勝おめでとうございます！」

沙摩柯が、上機嫌で劉備に挨拶に来ている。

「まずは、御参戦してください、御礼を申し上げます」

劉備は、沙摩柯をとりなし、大切にあつかった。それから、諸将に向かつてねぎらいの声をかける。

「雪が降っている。我が体も老いたが、帷幕の諸大将も老いたので、冬の陣も幾ばくか耐えうるに堪えてきている」

「そのなか、関興と張苞のような若い者の、活躍は見事である！」

劉備は、諸将の働きを労うかのように言葉をならべる。それを見ている、黄忠がすこぶる面白くない顔をして席を外してゆく。

黄忠は、顔を硬直させて怒りに満ちた様子である。

「おのれ、老いばれ扱いしおって！」

「わしだって、まだまだやれるところを見せてやるぞ！」

そういうと、その日の正午すぎに数十騎ばかりを引き連れ、呉に攻め入ってしまった。

心配した劉備は、関興と張苞に助成を銘じ、支援させるべく両者を投入することになる。

「関興、張苞、すぐ参り黄忠を救うのじゃ！」

劉備は、胸騒ぎがするのを感じている。続いて、張飛にも出撃命令を出して、黄忠の援護にあたらせた。

「いくらなんでも、無茶がすぎます!」
さすがの張飛も、慌てたのか命令に従い、軍を整え出ていった。

黄忠は、敵中に攻撃を加え、人働きせんと進軍中であつた。それを、味方の馮習、張南が見かけて声をかける。

「老將軍、どこへ参られる?」

黄忠は、くわつと、目を見開き馮習と張南に言い放つた。

「帝は、賀春の宴席で帷幕は、年老いて役に立たぬと申した。それがし、これより敵陣に攻め入り、ひと泡もふた泡も、吹かせてやるうと思つのでござる。」

馮習と張南は、黄忠をなだめた。

「敵は、若き孫桓が陣営を整え、新たに建業から十万に新手が合流している。」

「その将は、韓当と周泰の老練を配し、先手は潘璋、後ろ備えには凌統が控え、それを率いるのが甘寧であります。」

「そのような場所に、数十騎あまりで出かけるとは無謀ですぞ!」

しかし、黄忠は耳にもせず言い放つた。

「手前らは、見物しているがいい!」

そういつと、一目散に夷陵の自陣を通り過ぎてゆく。

「これは、見殺しには出来ないぞ!」

馮習と張南は、慌てて黄忠を追い掛けた。

「無茶するにも、程がありますぞ!」

そういつが、馬の耳に念仏といえようか、黄忠は敵の守る陣へと突撃してゆくのであつた。

呉軍は、馬忠と潘璋が迎え撃つ。

「ふん、この老いぼれめ!」

はじめに黄忠と潘璋が、やり合っている。激しく討ちあい、黄忠は力が入っている。

「関羽が仇、覚悟召されい!」

老骨に鞭打ち、獅子奮迅の働きを見せていた。そこへ、関興と張

苞の新手が追いつき、老将を迎えに来た。

「黄忠殿、今日は引き返しましょう」

関興が言つと、黄忠は動かさず闘い続ける。

「馬鹿を申せ！」

「老骨、黄忠も働けることを見せつけるのじゃ！」

そこへ、張飛がやってきて黄忠を止めた。

「黄忠殿、明日に再度、ご出陣しましょう！」

「今は、立て直す時。我が陣営に戻りましょう」

張飛は、黄忠を説得して陣中に引き返して行った。

「関羽の仇、かならず取るであろうぞ！」

そう言い残すと、黄忠は陣営に引き返してゆく。それを見ていた潘璋は、黄忠を睨みつけていた。

「さしもの、老いぼれめ！ 明日こそ、帰り討ちにしてやるわ！」
地団駄を踏みながら、立ち去る黄忠を見つめる呉軍がそこにはあった。

次の日になると黄忠は、わずかな手勢を率いて、再び敵陣を目指して出陣してゆくのであった。老骨の体に鞭を打ち、最後の働き場と意気込みながら、老練なる将は呉の陣へ突撃していった。

「黄忠が、攻めて参りました！」

呉軍の見張りが、潘璋に告げた。

「来たか、黄忠！ 目にももの見せてやるぞ！」

昨日の戦に、心を一つにしている呉軍は、一斉に矢の雨を降らせる。

「小童め！ それぐらいの、ひよろひよろ矢には当たらないぞ！」

黄忠は、獅子奮迅している。

「黄忠さまが、呉の陣へ攻め込んでおられます！」

伝令が、劉備のもとへ急いでやってきた。劉備は、張飛を呼び出し出陣させた。

「急げ、黄忠殿を救うのだ！」

乱れる、呉の陣へ黄忠を救うべく、張飛が急いでいる。黄忠は、一度退却してくるが。

「老将、あまり無理はしないでください！」
馮習の一言に、黄忠は顔色を変える。

「やかましい！」

それから再び、呉軍へ突っ込んでいく。飛び交う、矢を避けながら黄忠は奮戦していた。

必死で、呉軍の中を掻い潜り、暴れまわる張飛がいる。

すると、呉軍の名手の狙撃手が、黄忠を狙って矢を放った。矢は、黄忠に向かって飛んでくる。

「危ない！」

もうすぐ、合流する張飛の目の前で、黄忠の胸は射抜かれた。

「ぐわっ！ 無念である！」

そう言つと、黄忠は馬から転げ落ちていく。

そのとき、敵将の馬忠が首を取ろうと攻めかかる。ひん死の状態の黄忠は、最後の力を振り絞り、死出の土産と馬忠と数十合も撃ち合う気迫を見せた。

「白髪首、それでも惜しむか！」

黄忠の攻撃を交わして、撃ち合う馬忠は内心驚いていた。それから打ちあうも、その槍は黄忠に握られてしまうことになる。必死の黄忠は、槍を馬忠より奪い、突きまくってくる。しかし、馬忠は命からがら逃げ去ることに成功する。

「黄忠殿！」

関興、張苞が敵陣を、なぎ倒し黄忠を救いにやってくる。そして張飛が黄忠に手をかけ、背中に背負った。

「背中に乗りなされ！」

張飛は、涙を流しながら駆け抜けてゆく。敵を蹂躪しながら黄忠を背負って退却していく様は虎と化していた。胸を射抜かれた、黄忠は最後の声を絞って言う。

「張飛殿、すまぬ！」

「言うでない！ 黄忠殿！」

矢は、深く急所を射抜いていた。蜀の陣営に帰ってきた黄忠は、倒れ込み劉備に抱き抱えられる。

「許してくれ、黄忠！」

「取り返しのつかない、事をしてしまった！」

劉備は、涙を流しながら黄忠を抱き寄せた。蜀の功労者の老将は最後の時を迎えることになる。

「黄忠は、果報者でございます」

「劉備様に、従ったあの時より、お慕い申しておりました」

そういうと、黄忠は眼を閉じた。老練なる名将、黄忠の波乱に満ちた最後の生涯であった。矢を胸に受け、即死の状態で劉備に抱かれるまで生きた黄忠は激動の夷陵の闘いの中に息を引き取った。

「うおっー」

張飛が、涙を流しながら叫んだ。共に闘ってきた、老将を失った悲しみは張飛を怒らせた。

「黄忠殿を、失ってしまった！」

そう言い放つと、張飛は敵陣で突撃していった。その戦いぶりは、鬼神のようであり凄まじさが敵を圧倒している。

「黄忠殿の仇、許しまじ！」

張飛の蛇矛は、敵をなぎ倒してゆく。それに加わる関興、張苞も獅子奮迅の働きを見せている。並居る敵を蹂躪して、この日の闘いは幕を引く。

蜀の陣営では、関羽の次に黄忠を失い悲しみに暮れている。劉備は、涙ながらにその思いを誓った。

「おのれ、孫権！ その首をかならず刎ねてくれようぞ！」

きれいな、流れ星が夜空を照らした。それは、黄忠の涙に見えたのは、蜀の全ての人の目蓋に映ったであろう。

黄忠の遺骸は、成都に運ばれることになった。それから夷陵の地

で、名將の軍葬が行われた。

張飛は、涙が止まらない。悲しみは極限に達しようとしていた。

「今宵は、酒を飲むぞ！」

怒りに満ちた、張飛は酒を飲もうとしている。その時、赤い馬にまたがる武人が雲の上より現れるのが確認できた。劉備のいる前にその姿を見せている。

「張飛、忘れたか！」

「悲しみに暮れて、飲酒は己の弱さだぞ！」

雲より現れしは、関羽であり。その周りには、関平と周倉が控える。

「黄忠殿を迎えに参った！」

亡骸の黄忠は、関羽に抱かれている。

「張飛、よく訊け。悲しみに暮れて酒を飲めば、そこもとの誓いは水の泡と化す」

「それ位の思いでは、劉備さまを助けることは出来ぬぞ！」

そういうと、赤い馬に乗った関羽は天上に消えていった。

「兄じゃ！」

張飛は、浅はかな自分に気付き、天を見上げている。

その次の日、黄忠の棺は、幾度も鬪った戦地にて軍葬を悲しげに行なっている。そしてその日、劉備ら諸將は雪空の白雲を見上げながら涙を流した。それから、軍を馬鞍山^{まあんざん}まで進め、黄忠の遺棺を見送ることにした。

「別れであるぞ、黄忠！」

劉備が別れの言葉を述べると、馬車は黄忠の遺棺をのせ、僅かの將兵を伴ない、夷陵の地を離れ、成都まで旅立っていく。雪がちらついている空は寒さを増していた。吹き付ける雪は、馬車を覆うように降り積もってゆく。

つづく。

歴戦の勇士は散った

戦場は、雪が舞う。かすかに望む、蜀の地を白帝城から離れて冬を迎えている。

劉備軍本隊は、馬鞍山まあんざんから夷陵いりやうまで進軍すると諸將を集め協議を始めた。悲しきかな、黄忠の不幸に見舞われた蜀の面々は士気が恨みの涙で最高潮に達している。

「我が、思慮の薄さゆえ、蜀の忠臣の黄忠を失ってしまった。これよりは、憎き孫権を討つため全力を傾ける」

「この度は、関羽の仇を討つため進軍を決意した。寒さも見に堪える時期である、怠りのなきように！」

劉備の声は、震えているようであった。

「諸將は全軍を引き締め、これよりの闘いに備えるように。玄德はここに、総攻撃を命ずる！」

目を見開き、一点を見つめて劉備は進軍を命ずる。その表情は、怒りに満ちていた。

蜀の全軍を八手に分けると、その指揮を諸將に任せた。蜀の陣営も若い将が増えてきている中、古参の張飛は威風堂々としている。水軍は、総攻撃を心配していた黄権が率いている。

遠くから陸地に行く陣営は、黄権から見ても引つかかることが目に見えるようである。陸を進む軍勢の動きは、砂煙をあげているのが遠目からも解かる有様であった。

その様子は、諜報を探る物見に筒抜けであった。物見は、その状況を呉の陣営の先陣に伝えている。

「皇帝の劉備、自ら陣を率いてきているようだな！」

「陣形は、まちまちであるようだ。砂埃がそれを教えている」

先陣の韓当と周泰は、遠くから蜀の陣営を見ている。両將は、軍を進め迎え撃つ準備をしていた。

蜀の陣営の旗印が開くと、蜀の劉備が自ら馬に乗り前に出る。その横には、弟の張飛が旗本として身構えていた。

「呉の軍勢、叩き潰してくれ！ 朕はこの戦に、すべてをかける」
興奮する劉備を抑え、必死に抑える張飛がいた。やけに落ち着いた張飛は、呉の陣営に恐怖を与えている。

「あの張飛がいるなら、下手に手出しは出来ない！」

「雰囲気がまるで違うぞ。あの落ち着きは不気味だ」

遠目で、その姿を確認している陸遜が呟く。

「先陣の韓当と周泰は、下手にけし掛けねば良いのですが」
陸遜の陣営にいる、甘寧は先陣の動きが気になる様子である。

甘寧は病を抱えていた、この頃は体がいうことを聞かない状況で持病に苦しめられている。寒さが身に染みる時期、堪える我が身は老化の現象であろうか。

「この私も病に侵されている状況で、この寒さは見に染みる。昔みたいに暴れることは出来ぬ」

全盛期と違い、甘寧は戦力的にも衰えを隠せない。年老いたと感じる本人は、寒さも見に染みる有様である。体に無理をすることもなく状況を覗うばかりである自分に怒りさえも感じている。

迎える敵は、怒涛のような怒りに震えている蜀の軍勢である。過去に呉の水軍を統率する甘寧は、じつと蜀の様子を窺がっている。

呉の先陣を掌る、韓当と周泰は蜀の先鋒と開戦状態にあった。蜀の攻勢は凄まじく、呉の先陣を粉碎する。後退を余儀なくされた韓当の陣は浮足立っていた。

「ここは、夏恂が抑え討ちます。韓当様は陣を引いて下さい！ ここは危険な状態です」

そういつと、韓当の部下の夏恂かじゆんは戦場の中に消えていった。主を逃がし、向かってくる蜀の張苞と刃を交える夏恂は必死であった。

「相手にとって、不足なし！」

凄まじい張苞の攻撃は、遠目から見ている張飛を喜ばせた。

「我が息子も、たいした成長したもんだ！」

夏恂は、攻撃をかわすだけで必死であった。次々と向かってくる敵を、追い払い張苞の攻撃を受けている。

しかし夏恂は、張苞と数十合も撃ち合うが、敵わず討ちとられてしまう。張苞は夏恂を討ちとると、騎馬を返し深追いは止めた。

「深追いはするでない、伏兵はつきものだ！」

張飛が、息子の張苞を引きとめる。必ず伏兵が潜んでいると考えたのである、張苞はそれ以上に敵を追うのを止め自陣に帰着する。

周泰の陣も、蜀の陣営に押されている。並みいる敵を迎え撃つが、関興率いる一隊に蹂躪されている。敵わじと思うや、後退を開始する。

「ええい、引けえい！ 陣を立て直す、構わず引くのだ」

周泰が危険と思うや、弟の周平がとつさに身構えて関興の前に立ちはだかった。

覚悟を決めた、その表情は兄を助けることで必死である。

「兄じゃ、ここは危険です。早く陣を引きなされ！」

殿として、周平が立ち向かう中、周泰は陣を後退することになる。

「邪魔だ、どけえい！」

関興は、一撃で周平の首を討ちとった。勝負はあっけなく決まった。あまりの凄まじさに、出す手もなかった周平の完敗であった。

倒れる骸をみる、周泰は後退しながら自らの弟の犠牲で命を長らえることになる。今日まで、呉のために命をかけた周泰の弟は、夷陵の地で命の花を咲かせた。

「許せ、周平！ お前を失ってしまったことは忘れまいぞ」

蜀の陣営は、呉の先陣を蹂躪して、数多の屍を作り越えていった。流れる河は、赤く血の色に染まり。地上は倒れる馬や、傷ついた兵卒のうめき声が響いている。

「呉の陣営も、たいしたことはない！」

張飛は、そう云った劉備を横目に見ながら、簡単には行くまいと考えている。劉備は、後退する呉の陣営を見ながら喜んでいる様子である。

ひとり、冷静に戦場を見つめる張飛は、思いもよらない言葉を呟く。「本隊の陸遜が、静止しているところが気になる。あ奴は、兄じやを油断させた張本人！ ただの武将とは違う気がするが？」

その言葉を、聞いていた馬良は張飛と話す。

「あの陸遜、若輩とはいえ油断がならぬようです！」

「やはり、張飛殿は冷静に考えておられたか？」

まだこの時点において、陸遜は呉の総司令官には任命されていなかった。退却を続ける呉の救世主たる、陸遜は蜀の攻勢を冷静に判断して分析していた。

「この戦場に、孔明殿がないのが気になります。敵の動きは、何かと撤退に徹しているように見えますが？」

馬良の言葉を、じっと聞いている張飛は、孔明がさし向けた書状の意味を考えていた。

「深入りしすぎているようにも感じるが、劉備様は上の空であることが一番に気にかかる！」

「確かに、関羽の兄貴が不覚とはいえ、陸遜の知略に眩まされたのが一番の失敗だ！」

「つい最近まで、頭に血が上っている自分なら気がつかなかった！ 張飛は馬の手綱を握ると、馬を走らせて呉の退却していった方角を配下に調べさせた。

暗殺しようとした、張達と范疆が張飛の側を固めている。

「ここは、我らが敵を覗きます」

そう言つと、張達と范疆が馬を進め、呉の退却した方向を探るところになった。

「張飛様は、機嫌次第で行動を起こすことをお控えになられている。当時を知る、我らが思うようだから、呉では口が開いているようで

あると思う」

そう言う張達が、范疆に話しかけている。

「変わると思えぬ、張飛様であるが。よっぽど、関羽様には参ったのであるうな」

「まったくだ！」

その二人の横を、通り過ぎる一団があつた。異様な出で立ちをした彼等は、沙摩柯の率いる南蛮の援軍であつた。

「横を通らせてもらうぞ！」

伏兵の始末は我等が引き受ける」

そう言つと、沙摩柯は平然と張達と范疆を見送つた。それを見ていた張飛が、沙摩柯と会話する。

「おい、沙摩柯殿！ こ奴等二人も、そなたの軍にいまどき加えてはくれぬか？」

「はあつ？」

張飛は、はじめから呉の伏兵があると睨んでいた。草木の揺れを、微妙に感じていたのである。決戦はこれからと、思う張飛は南蛮の援軍である沙摩柯の実力も認めている。

「今しがた、偵察の意味で沙摩柯殿をお守りするのだ！ これは重要な役目だぞ、心してかかれ」

配下の張達と范疆に、手勢を与えた張飛は劉備のいる本陣に戻つて行く。

「頼んだぞ、張達。范疆！」

本陣に戻つて行く、張飛は粗暴さが抜けていた。范疆と張達は、沙摩柯に付き添い、呉の潜んでいるような場所を目指していく。

木々が凍る寒さの中、伏兵を買つて出た甘寧は震えていた。さすがに寒さが身に染みる。

じつと敵を待つ、軍勢も寒さとの闘いである。蜀の猛攻に、蹴散らされた呉の周泰と韓当も、陣を整え林の中に潜んでいる。

「このままでは、終わらせまいぞ！」

弟を失った、周泰のメラメラと煮えたぎる心のうちは穏やかでない。伏兵を潜ませるように、命令を与えたのは甘寧であった。

蜀の軍勢が通ると踏んだ、甘寧は林の生い茂った場所を以前から確認していた。しかしその作戦も、張飛の歴戦の勘が上回ることになる。

そこを蜀の偵察部隊である、沙摩柯の一陣が通る寸前で立ち止まる。体制を整え、弓を射るべく兵を前に出す。

「止まれい！ この地で止まるのじゃ。伏兵はこの地ぞ！」

沙摩柯は、森林に向けて火矢を放つ作戦を敢行した。たちまち森は火に包まれて、潜んでいる伏兵は慌てだした。

「勘づいておつたか！」

甘寧は森を追われ、退却することを告げる。韓当と周泰は、火が燃えたぎる林をどうにか逃げまどい脱出に成功する。退却する甘寧の陣に、鬼神の如く沙摩柯が迫って来る。

勢いにました蜀の陣営を、横目に見ながら退却する甘寧は地団駄を踏んだに違いない。

「おのれ、南蛮の荒くれ武者め！」

そう叫ぶ、甘寧の頭上から矢が降り注ぐ。絶体絶命の中、甘寧は矢をかわしていたが数本の矢が身に刺さる。一本は致命傷といえる部分を突き刺していた。

「もはや、これまでか！」

どうにか蜀の猛攻をかわし、逃げてきた甘寧は病床の上、沙摩柯の放った矢に急所を射抜かれている。富池口（湖北省、公安の南）まで、たどり着いた頃は、ただ一人になっていた。

「よくぞ、今まで付いてきてくれた」

連れ添った馬を、降りると木の下に座り込み絶命した。ときに呉の名将甘寧は、無念の最期を迎えることとなる。

歴戦の勇士が、座り込んだ木の下には連れ添った馬が悲しそうに見つめている。そして、とうとう蜀は夷陵の陣まで迫って来ている。

仇の潘璋

寒さが厳しい中、夷陵の地にも梅見月が輝いている。蜀は？帰城を本拠として、馬鞍山を手中に収め、夷陵の城壁を見つめている。

未だにこの戦場では、蜀の攻勢が繰り広げられている。そしてなおも、意気上がる蜀の士気は高く、呉軍を圧倒している状態は変わらない。

そんななか、長期線を覚悟する呉の陸遜は、蜀の動きを観察しつつ、用心しながら警戒を深めている状態であった。彼は若く、諸将の信任を得ていない。その苦心は、蜀の攻勢を許すばかりか、連戦連敗の責任の重圧さえ感じ入る。

「時が来れば、必ず蜀にも油断が生まれる」

その一言を呟くと、陸遜はしずかに眼を閉じた。

そんななか、白装束に身を固めた関興は、父の仇をいつまでも討てない状況に苛立ちを心ながらに覚えているというのが現実である。「未だに、父上の仇の潘璋の首は上げておらず。この不甲斐なき関興を、お許しくだされ！」

関羽の御霊みたまにひれ伏し、祈りをささげる関興は、復讐みたまのその瞬間を待ち望んでいるのである。

その様子を、文官の劉巴と郭攸之が奥から見ていた。劉巴はプライドが高く、張飛をよく思っていないのが、本音の部分にある人物である。

「関興の気持ちも解からぬでもないが、冷静に振るまわなければ、二の足を踏む可能性も大きいぞ」

人物を見る目は、劉巴の素晴らしい所である。まだ若く、将来性を期待されてはいるが、態度の悪いところは欠点である。

「父上のご最後を、悔しさに思うのは仕方のないこと。それだけ、関羽様の存在は大きいのです」

冷静に考える、郭攸之は蜀の若い文官の一人である。関興は自室に戻り、就寝の時を迎えた。
夜は更け、蜀の兵卒も疲れているのか、静かに寝息を立てている。月は輝き、妖しく地上を爛々と照らしていた。

朝が来た。冬の早朝は寒くて、体に堪えるように厳しく冷え込んでいる。霧が立ち込め、夷陵は緊張感を増している。

そのような状況で、関興は兵馬を整え、これから始まる闘いに備えている。そして張飛は、その姿に関羽の面影を重ね合っている。「親父に、似てきたじゃないか。関羽の兄いも、喜んでいるだろうぜ！」

張飛の口調らしさが見えている。その姿に関興は、張飛らしさが出てきていると思った。

「今日は、冷えるぜ！ 心して掛かれよ。潘璋の野郎にあつたら、教えてやるぜ」

そう言い残すと、張飛は関興と別れた。関興は先陣を務めるべく、霧の立ち込める戦場へと向かってゆく。

関興の部隊は、乱れることなく整列が行き届いて、一筋の乱れも感じられない。

「進め、呉の敵陣はもう見えてきている！」

すぐ横には、張苞の陣が疾走している。まさに好敵手と化した、張苞の陣が隣にあることも、関興の部隊の士気を上昇させている。

関興の部隊には、亡き関羽の部隊の生き残りも、多く含まれている。主を関興と変えた部隊は、獅子奮迅の活躍を見せてきている。

そうした状況で、敵の一陣に当たる破壊力は、群を抜いている状況である。

「敵は陣に張り付いたまま動かぬ。気の抜けた猫のようじゃ！ 敵陣を崩すのは、今が好機ぞ！」

関興の声は戦場に木霊し、率いる部隊は怒涛の如く、呉の部隊に

攻めかかっていく。

その斜め後ろに続いていく、張飛の部隊は先陣の様子を見ている。「よし、我らも負けぬ様に、ぶち当たって行くぞ！」

張飛は、昔と変わらぬ獅子奮迅ぶりを発揮していた。その姿は、鬼神のような凄味を見せている。

呉の陣営は恐れをなし、次第に戦意が失っていくのが読み取れる。

その呉の陣を指揮しているには、韓当と周泰の老練の将たちである。

「相手が悪い、あの甘寧亡きいま、無理強いは禁物である！」

韓当が、張飛の奮迅ぶりに恐れをなし、後退を指示しようとしていた。そんな様子を覗う、周泰は頭を抱えている。

その場を見ている、亡き陳武の庶子の陳表が近づいてくる。

「陸孫殿は、機会を探っておられる。今は、後退する時と存じます」

「それに今は、蜀の攻勢が勢いづいております。兵の消耗を抑え、機会を待つのも宜しかろうかと」

呉の先陣にいる、武將の陳表が韓当に意見を具申した。

陳表は、三国志演義には登場しない人物。三国時代の武將であり、陳武の子（庶子）である。陳修の弟であり、子に陳敖がいる。字は文興。呉に仕えて、信義・仁愛に厚い人物であったという。

退却をしようとしていた、呉の陣営の殿を買って出るものがいた。

「殿は、わしが担当いたす！」

つい先ほどの甘寧の死に伴い、配下の部隊を任された潘璋が買って出たのである。

味方の退却を一身で引き受け、呉の殿を務める潘璋は、蜀の進軍する方向へ身構えている。

「ここに仇を討つ、絶好の好機を与えてもらった！」

関興は、仇の潘璋を確認すると、部下を引き連れ進軍してきた。

「こわっぱ、目にも見せてくれようぞ！」

潘璋は奮戦し、味方を逃がすことに成功する。率いる部隊は、次々に討たれていく。

殿の役目を終えて、命からがら、退却する事を決めた。

「もはや、これまで。退却致せ！」

身を翻すと潘璋は、関興の目の前から疾走していく。

「逃げるか、卑怯者！」

関興は、潘璋を追いかけるが、途中で見失い、深入りしたことに気がつく。辺りは、どっぴり日が落ちて、味方さえ確認できない状況に陥ったことになる。

関興は、その後も夜道を彷徨い続けている。

蜀の陣営では、戦後処理が行われている。異変に気がついたのは、張飛であった。

「関興がおらんぞ！」

劉備の報告しようとした張飛は、先に張苞に支持を与える。

「張苞、今すぐ関興を探して参れ！」

顔色を変えることはなかった張飛は、落ち着いていたようである。

「承知致しました。これより張苞が、探しに参ります」

張苞は、兵馬を整え関興の救出に向かっていく。その動きは、俊敏で隙が感じられない。

「まあ、関興なら大丈夫と思うが。張苞をやればよかるう！」

張飛は、劉備のいる幕舎に向かっていく。

「兄じゃ、関興が戻りませんが、ただいま搜索に張苞を遣わせました。潘璋を追って、深入りしすぎたのでござりましょう」

しかし、劉備の機嫌はすこぶる悪かった。

「敵の待つ、この敵地で一人は危険だぞ！ 何を落ち着いておる、お前も探しに行かんか」

罵声の如く浴びせられた言葉には、張飛も無理もないと思った。

「わかりました。俺も参ります！」

張飛は、暗い夜道を部下を率いて出陣してゆく。

「まあ、無理もなからう。関羽の忘れ形見の関興だ！」

「ついて参れ。急を要する！」

疾走していく張飛の部隊は、関興を探しに進んで行く。

関興は、僅かの供と夜道を彷徨うかのように、進んでいた。月は傾き、夜は更けていく。辺りは静けさを増し、静寂が緊張感を増している。

「殿、本陣に帰還するのは、この夜では不可能と思われませう」

どれくらい、進んだらうか。関興の一軍は、野宿を覚悟していた。敵陣深く、入り込んでいる感覚がする。

「もう少し、進軍する。この辺りは危険である」

夜道歩んで行くには、月が頼りになる。関興は、勘を頼りに行軍している次第であった。

夜道を進んでいると、一軒の屋敷を見つけた。配下の将が、一夜の宿を申し入れることになった。

「夜分、失礼ではあるが、一夜の宿を提供してもらいたい」

関興の部下が、丁重に宿の主に願い出る。

「どうしましたかな、甲冑を着込んでおられるようですね？」

「夜も更けております。こんな宿では御座いますが、どうぞ、お休み下さい」

宿の主は、一行を向かい入れ、一夜を提供してくれた。入口に入ると、屋敷の主が、関興には月明かりで微かに見えた。年老いた屋敷の男は、そこに立っている。

「かたじけない、一夜をお借りいたします。夜分の御無礼、申し訳御座いませぬ」

ふと、関興は考えた。宿の御人に、見覚えがあった気がしたのだ。考えてみたが、思い出せない。

(どこかで見えた顔である。はて、誰であったであろうか)

関興は、宿の人物が気になった。気になってはみたが、聞くのも迷惑かと思ひ黙っていた。

「もしや、蜀の軍の方たちでは御座いませぬか？」

宿の主は、親切にも宿を提供している。関興は、素性を明かすことを決断して、事の次第を丁寧のべる。

「我らは、蜀の関興の軍の者たちである。夜分、邪魔をいたしたことは、御迷惑と承知しております」

「一夜、宿を借りたら、朝には出ていく所存であります」
そういつと、関興は静かに目を閉じている。

「もったいないお言葉、あの関羽様の御子息様でありますか。私は、過去に、関羽様にお世話になっていた者です。名を楊毅と申します」
楊毅は、戦乱明けくれぬ頃に、荊州に住んでいたことがある。その頃に、関羽に世話になった逸話があった。

「忘れもしませぬ、関羽様のお人柄。誠に心優しい、武人でありました」

「私は士官もせず、流浪の日々を過ごしていた頃、関羽様の屋敷に御奉公しておりました」

楊毅は戦乱の中、雇い主の関羽に、生き別れていることも正直に関興に話した。

「そうか、呉の侵攻から逃れて、隠れ住んでおったのじゃな。これも何かの縁、こうして再会できるとは、亡き父のおかげであろう」

関興は手を握り、年輩いた屋敷の人物にお礼をする。それから、屋敷の主は、蓄えておいた酒瓶と、僅かな酒の肴を用意してくれた。「僅かですが、空腹を満たすには役立つでしょう。関興様達で、頂いて下さい」

関興は、楊毅の心づくしを、この上なく有り難く思った。

「かたじけなく感じる。宿を頂いた上に、おもてなしまで頂いては、何とお礼を申したらよいか」

関興の一派は、もてなしを受け、空腹を凌ぐことが出来たのである。そして、一夜の宿を借りた関興の部隊は、楊毅に手厚いお礼をして去って行った。

「関興様のお姿には、関羽様が乗り移っておられるようだ。もうじ

き、関羽様が仇に会わせてくれるであろう」

楊毅は、これからの関興に起こることが、解かっているかのような発言をする。

関興の仇の潘璋は、自陣に戻ることもなく、夜間を野宿で凌いでいた。供の者も僅かで、殿を担当した部隊は、散り散りになっている状態である。そうしているうちに、潘璋は夜分に馬の嘶きを聴く。その馬の嘶きは、潘璋の耳に木霊している。

「はては、敵の搜索部隊か。この場は危険かもしれない」

潘璋は、その嘶きが不気味に聞こえた。無論、他の配下の将には聞こえていない。

潘璋は血相を変え、馬に掛け上がり手綱を引き、馬を走らせた。

「ここは、危険だ。全軍、退却せよ！」

追いかける部下を尻目に、潘璋は取り乱している様子である。逃げ惑ううちに、逸れて一人になった時は、暗がりの中であった。

「部下と、逸れてしまった」

そう思うと、なんとなく心細く感じる自分に気がつく。そうしているうちに、再び馬の嘶きに気がついた

辺りは、静まりかえっている。僅かに月明かりが、不気味に照らしている。

その月明かりの中に、緑の直垂に、黄金色の甲冑。そして、赤ら顔に美髯の武将が見えている。

「ぐわあつ、貴様は関羽。迷い出やがったか！」

潘璋は、関羽の亡霊と遭遇したことになる。狂ったように、夜道を逃げ惑うが、関羽はぴたりとついてくる。

「どこへ行く、潘璋！」

「貴様の命は、もうじき露と消える」

千里を走る、赤兎馬まで、潘璋を憎んでいるかのように追いかけてくる。必死に逃げる潘璋は、どうにか関羽から逃れることに成功する。気がつくくと、辺りは明るくなり、すっかり夜が明けていた。

安心しきっていると、宿を出たばかりの、関興の部隊と偶然にも遭遇することになる。

「貴様は、潘璋。父の仇である、憎き奴め！」

「今日は、逃さぬぞ！」

関羽の亡霊に、疲れきっていた潘璋は、ただ驚くばかりであった。逃げようとするが、関興に切りつけられて落馬した。

「しまった。不覚であった！」

関興の降り降ろした刃は、潘璋の胸を深く切りつけている。

「覚悟しろ、潘璋！」

倒れ込んだところを関興にとどめを刺される。関興の手には、青龍偃月刀が握られている。父の形見を、取り戻した瞬間である。

寒空が広がる夷陵の地で、関興は父の仇のひとり討つことに成功する。白い霧が、立ち込めている彼方に、僅かながら、関羽が見えている感じがしたのは、関興の錯覚であろうか。

つづく。

戦況の変化ともう一つの仇（1）

連戦連敗のなか、奥地へと蜀の侵攻をゆるしている呉の陣営では焦りの色が出始めていた。

理由は簡単である、復讐に燃える蜀の勢いは、止まることを知らなのまま、なおも一層、勢いに乗っている状況であるからだ。

しかし蜀の陣営は、兵力が分散している有様で、統率性を欠きはじめていることに劉備は自らの焦りの色で気が付いていない。

そして、一番の問題は、長期の遠征による度重なる疲れと、補給線の確保を如何にするかである。

その事に関してが、頭痛の種であったことは、参謀の馬良を心から苦しめている状況である。

「ここまで、長期化するとは、予想を裏切る展開である！」

その状況を心配している張飛は、諸葛亮のいる漢中に馬良の弟の馬謖を派遣して、戦地での事の細かくを伝えようとしていた。

その馬謖の護衛には、新参の王平おうへいが選ばれ、馬良の指示に従っている。そして一路、漢中を目指して夷陵の地を離れてく伝達役の一行は、準備を整えて、臥竜の待つ場所を目指してゆく。

「弟の馬謖が、諸葛亮様にご意見をお聞きに参ったのには、私の想いもあります」

状況を冷静に見つめている馬良でも、攻勢に焦る劉備を諫める言葉は心に届いていない。

「劉備様は、冷静さを欠いておられます。行動に、充分にご用心くださいませ！」

連戦連勝の攻勢とはいえ、一瞬の油断が危険をはらんでいることに馬謖は、用心するようにと馬良に耳打ちして戦地を去っている。

そんななか、魏の曹丕は中立の立場を決め込んで、ずる賢き獣のように高みの見物を装っていた。

呉と蜀の双方が、必死にも総力戦を繰り広げる最中、総大将に歴戦の勇士の曹仁が選出され、合肥に駐屯させている。

彼は時至れば、濡須に進行して、呉の側面を衝こうと兵馬を鍛え上げている状況下であった。

曹丕は、閣議場に武官・文官の諸将を集め、呉と蜀の状況を備に連絡させて、事の状況を詳しく把握するべく、敵地に諜報を廻らしていた。

その時、蜀の状況を告げる伝令がやってきた。

「申し上げます。物見の状況によれば、劉備は連戦連勝を重ね、呉の敵地に深入りしているようです」

「それに主力は、陸地と水路に分散しているようで、一瞬の油断次第では大いなる危険をはらんでいます」

「それに蜀の陣営は、陸地に五十箇所の陣を連ね補給線をたどり、水路には黄権率いる一隊が数百里に連なっている有様です」

伝達役は、事の詳しくを、事細かく述べると、使命を終えた安堵感を覚え、その場を早々に立ち去ってゆく。

「劉備は、戦のやり方を焦る状況下で、取り戻せぬ事の重大さに、気が付いていないではないか！」

「この一戦、劉備は自ら首を刎ねる気が。戦を知らぬ訳ではあるまいに！」

「関羽の恨みを晴らす一念が、事の判断を狂わせたようだ。老いも事の是非を狂わせるとは、劉備は自ら墓穴を掘ってしまった！」

手を叩きながら、曹丕は不敵な笑みを浮かべ、やがてはやってくる魏の侵攻を確信している。

「この状況を、合肥の曹仁に伝えよ！」

曹丕は早急に、伝令を伝えるべく、劉曄を呼び寄せた。

「劉曄、夷陵の戦いは、呉の大勝に終わるであろう。そのとき、呉の油断が生じることになる」

「その隙を狙って、曹仁に濡須への総攻撃を命ずる！」

そして、文官の一人、劉曄が現れ、伝達役として合肥に赴いてゆく

ことになる。

「今より、合肥に赴き、事の状況を曹仁さまにお伝え申します」

早急にその場を立ち去った劉曄は、意見を具申することもなく、己の仕事に従事してゆく。

内心、曹丕のずる賢いやり方には、曹操の面影を垣間見ることがある。しかし、冷酷で非常なやり方に劉曄は大いなる不満を抱いていた。以前、曹操が生前の時は重用され、意見を具申すれば聞いてもらえたことが多かった。

それに比べ、曹丕は兄弟を冷遇し、僻地に派遣している状況である。また、何処か好きになれぬ暗愚な性格が、その行く先に暗雲を作っている。

「いずれ、魏は内紛で崩れ去るであろう!」

友人である、老骨な賈?にそう言い残すと、劉曄は悲しげな表情を浮かべ、曹丕のいる閣議場を出て行った。

賈?は、その不穏な言葉を曹丕に伝えることもなく、閣議場を早々に立ち去っている。

「この賈?も、老いた老骨である。いまさら、つまらぬ讒言をしたところで何の得になるう」

閣議場を出た賈?は、月を見上げ、長らく生きらえた日々を思い出しているようである。

その怒涛のような人生は、晩年を迎えた老骨なる名軍師の風格が、いつそうその生き様を伝えているかのようであった。

季節は春を迎え、桃の花が咲いている時期である。思えば、遙か遠い記憶の桃園の誓いが目に浮かんでくる。懐かしいと思った、劉備は張飛を従え、桃の木が茂る丘陵で一時の休息を迎えていた。

柔らかな日差しの中、誓いを語った桃園は昔の思い出の中にある。その記憶を辿ってみたいと思う。

黄巾軍対策の義兵を募集している高札の前で劉備がため息をついていた時である。

「大の男が世のために働かず、ため息をつくとは何事だ！」

その状況を見て、声をかけてきたのが、身長八尺（約一八四センチ）、今は部類の名将と云われる張飛であった。

「自分がため息をついたのは、己れの無力に気付いたためだ！」

劉備はそう言うと、張飛はそれなら自分と一緒に立ち上がるごと、桃園の下で酒に誘うことになる。

訪れた酒場で彼らは、身長九尺（約二〇八センチ）、髭長二尺（約四十六センチ）、赤ら顔と見事な髯を持つ一人の偉丈夫、すなわち今は亡き関羽と出会い、意気投合することになる。

「我ら三人、姓は違えども！ 兄弟の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、困窮する者たちを救わん！」

「上は国家に報い、下は民を安んずることを誓う。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を誓う！」

張飛の屋敷の裏の桃園で義兄弟の誓いを交わした三人は、彼らの呼びかけに応じた者達と酔いつぶれるまで酒に興じたという。

あれから、月日は流れ去った。気がつけば、髪には白いものが交じっている。

そして、約束を交わした関羽は、もう此処には存在すらしない。

「なぜ、我を置いて、逝かねばならぬ！」

「約束を叶える時は、もうそこまで来ている」

劉備の顔色には、計り知れない悲しみの感情がみえている。そう思うから、止めずにここまで従う張飛が、今回が最後になるであろうかもしれないと覚悟を秘かに決めていた。

連敗続きの呉の陣営では、陸遜が総大将に選任される丁度、一か月前の時期である。

戦いの状況が芳しくない自陣の守りに着いている呉の兵卒には、蜀の関羽の配下として働いている面々も見受けられた。

その敗軍続きの状況下で、敵陣に寝返った士仁と糜芳が先陣にあ

った。

糜芳は、劉備の夫人（糜氏）の兄である。劉備が益州に入った後、荊州総督である関羽の配下として南郡に駐屯し、公安を守る士仁と共に荊州の防衛を任された。

しかし関羽が彼らを軽んじていたこともあり、かねてから折り合いが悪かった。

二一九年、関羽が北上して樊城攻略を開始すると、糜芳と士仁は物資補給などを行うだけで、全力で支援しようとしなかった。

また、南郡城内で失火事件が起こり、軍器がいささか焼失した事があつた時である。

これらの不始末を聞いた関羽は糜芳に伝える。

「わしが凱旋した後に、このことをわが君に報告し、汝を容赦なく処罰するぞ！」

怒りを顕わにして、糜芳を激しく咎めた。これ以降、糜芳は関羽を恐れるようになり、内心不安であつたことはいうまでもない。

その後、孫権配下の呂蒙が、南郡攻略を開始すると、糜芳ははじめ城に立て籠って闘う覚悟を決めていた。

しかし、先に降伏した士仁が呂蒙といるのを見ると、酒と肉を用意し、城門を開いて呂蒙に降伏したのである。

その両名は、呉の陣営にあり、蜀の兵と対峙していた。その両名を覗く人物がいた。

士仁に降伏を勧めた張本人の虞翻である。今の蜀の勢いを止める、立役者の士仁と糜芳の可能性を秘かに見据えていたのである。

孫権に謁見するべく虞翻は、この二人に声をかける。

「この蜀の攻勢時、呉への忠誠を示す良き好機である。両名には先陣に立って、一働きしてもらいたい！」

糜芳と士仁には、二心はなかった。

蜀を裏切った罪は重い。そう恥じる心の中には、晴れて戦場で散る覚悟があつた。

賀斉に配属された糜芳は、最後の活躍する機会を探していたのであ

る。

「ありがたき幸せ！」

孫権にその異心のなき事を伝えると、ひとこと虞翻は進言した。

「士仁は、降伏の際に涙を流しております。それに比べ、糜芳は蜀の重臣でありながら、誇りや威厳などありません。」

「簡単に裏切った糜芳は、信用ができませんが。先陣で華々しい死を与えるというのは如何でしょう。」

「あくまで、戦わせるのです。両名の死に際で、その違いがお分かりになりますぞ！」

「それに、怒って進軍する蜀に対する罨を仕掛けることができます。」

「士気を上げるべく、復讐に燃える蜀の将を討ちとる好機と云えましょう。」

「士仁と糜芳の後ろには、狙撃兵を忍ばせれば一網打尽でしょう。」

蜀の怒りに向ける盾の役に、士仁と糜芳は運命的に選ばれた。そして、出陣の式典を華々しく終え、意気揚々と両名は戦場に赴いてゆく。

「わしは、死に際に関羽様に謝罪の言葉を述べたい！」

そういう士仁と、対照的に糜芳は少しばかり浮かれていた。

「やっと、呉の将として出陣できる。」

一般兵卒に身をやつしている状況が、この一戦において一変した。今や、兵を率いる呉の將軍となったと、浅はかな想いを抱く糜芳の愚かさ^{おろそかさ}が自らを墓穴に入れこもうとしている。

劉備の率いる一隊と、士仁と糜芳のいる賀斉の率いた遊動部隊は亭の手前で激突しようとしていた。

蜀の物見は、呉から進んでくる一隊の報告をいち早く、張飛に伝えていた。

「なに、裏切り者の士仁と糜芳が、賀斉の一陣におるのか！」

「これは、我らにとっては最高の好機。是非、劉備様の前で討ちとり、蜀の士気を上げたいものじゃ！」

少々、頭の弱い張飛には、呉の虞翻の畏など気がつく術はなかった。その油断が、危険へと結び付けていくかのように運命は動いていたかのようである。

一線を交えるべく、呉の後方には歴戦の将たちが配置される。恨みに燃える周泰、もう一人の仇である馬忠、先の戦で敗戦を喫して再起に燃える孫桓、そして兵馬を整えた韓当、最後にその状況を冷静に観察する陸遜が続いていた。

つづく。

戦況の変化ともう一つの仇(2)

漢中へ向かう、道を彩る晩春のよそおいは、何処か不安なる気持ち
を馬謖に植え付けている。

「急がねば。これから暑くなれば、事の状況は一変する」

蜀の陣営では、たび重なる長期戦に突入した疲れが出はじめてい
た。それを不安視する馬謖は、漢中へ急いでいる最中である。

その漢中には、魏の動きに備えるべく、劉備の命で魏延せいえんが赴任し
ていた。

以前、魏延はその赴任に際し、劉備に対し「曹操が天下の兵を挙げ
て攻め寄せて来るならば、大王のためにこれを防ぎ、配下の將軍が
十万の兵でやって来るならば、これを併呑へいどんする所存でございます」
と語り、劉備や群臣はその勇敢な発言に感心したという出来事があ
った。

その後、劉備が皇帝に即位すると、彼は鎮北將軍に昇進している。
その魏延を監視する諸葛亮は、成都を離れ、魏との接点である漢中
に赴き、劉備のいる夷陵のことが気に掛るのか、落ち着かない様子
で、幕僚の費イを呼び寄せ、その心境を語り始めた。

「関羽様が亡きあと、劉備様はその仇討ちに慢心しておられる。私
は、劉備様の心の内も理解するあまりに、その呉への報復戦を止め
ることが出来なかった！」

その心中を察するあまり、事の是非を誤ったような気がしてなら
ないと、孔明は溜め息交じりで呟く。

「やはり、諸葛亮様もそうお考えでしたか！」

「私は、劉備様が心配でなりません」

幕僚の費イは、諸葛亮の心境を充分に理解している。彼は、劉備
が蜀を支配するとき、益州に留まりその家臣となった人物である。

「流行る気持ちは解からぬでもないが、今回の私情なる呉への進行
は、蜀の内政事情にも影響を与える」

「ましてや、深入りし過ぎたために、呉の反撃を食らえば、状況は切迫すると思われる」

冷静に判断する諸葛亮は、苦しい表情を浮かべている。

「しかし、落ち着いた魏延の態度は、油断ならぬものがあると、私は考えています」

そんな表情を見つめながら、費イが本音を漏らした。

「そう思うか、あの男はあまりにも考えが壮大すぎる。この状況では、その内にある想いが災いすることさえありうる」

「私が、こうして漢中を訪れ、内政の状況をくまなく目を通してるのは、魏延の行動を監視している意味あいもある」

漢中の魏延の監視、そして呉の夷陵にいる劉備の心配のこと、諸葛亮は心痛の想いで、遠い呉にいる蜀の軍隊の状況を心配していた。

さて、夷陵に布陣する蜀の面々は、コウ亭の目の前に布陣する呉の先陣にいる糜芳と士仁のことを見つめている。

「裏切り者の士仁と糜芳の首、是非とも挙げてやる！」

「いくぞ、者ども。奴等のいる呉の陣営を蹂躪してやる！」

畏とも知らず、張飛が突撃を命じようとしていた。すると、その視線の向こうには、二人の将軍が立ち塞がっていた。

「お待ちください！」

「ここは、我らが敵陣に様子を探るため先陣となりましょう」

その二人の男は、張飛に以前、暗殺を企てようとした張達と范疆である。たび重なる張飛の仕打ちに、我慢の糸も切れかけていた頃と、今の張飛の様子を知る両名は、張飛の危険なる行動を抑えようとしている。

「何をいう！」

「貴様ら、邪魔立てする気が！」

一瞬、張飛は以前のようにその表情を変えようとした。

「張飛、奴等の言い分も聞いてやれ！」

何処かで、聞いた声が木霊する。

それは、紛れもない張飛の義兄弟、今は亡き、関羽の声にも聞こえてくる。

「焦れば、我が身と同じ運命になるぞ！」

もう一人の老将の声がする。

その男こそ、以前、張飛の目の前で胸を射抜かれ、落命した黄忠の声である。

「我ら、二人は、今は蜀の軍神となり、お前たちを見守っている。

どうだ、この二人の忠誠を見るのも、いい機会であると思わぬか！」

張飛は、目を驚いたように見開いている。まさか、この戦場に両名の声が響き渡るとは思っていない。

「姿を見せてはくれぬのか？」

その様子を見ていた劉備が、涙を浮かべながら、張飛のところにやってくる。

「私にも聞こえたようじゃ。あれは、まさしく関羽と黄忠の魂の声に違いない！」

「張飛、十分に警戒しろ！」

劉備の普段の焦る表情とは、違いを見せている。劉備は先陣を、張達と范疆にいい伝えと、張飛に向かって言い渡した。

「お前は、この二人の後ろにつき、呉の先陣をくまなく蹂躪してい。されど、長き突撃は避けたほうが肝要であるぞ！」

「分かり申した。張飛、肝に銘じ。出陣いたします！」

先陣を二人に任せ、張飛は蜀の陣から突撃していく。

「来たぞ！ 先陣は張飛の率いる一隊だ！」

先陣にいる、張達と范疆を見つけた後の陣営は、てっきり張飛が怒って突撃してくるように思っている。

しかし、陸遜は一人、冷静に考えていた。

「張飛が、うかつかと罠に掛かる奴なら、苦労はしない！」

「おそらく、先陣は情報を探るために、張達と范疆をよこしたと思うのだが……」

虞翻はその言葉を聞いていた。

「されど、敵陣に張飛がいるのは決定的！」

「怒らせれば、奴のこと。どう動くかは解かりませぬぞ！」

虞翻は、陸遜のことを信用はしていない。ここまで、連戦連敗をしてきている状態が諸將の焦りを作りだしている。

「この状況下で、この？亭を抜かれるのは危険です。ここは、この場所で敵を食い止めましょう！」

先の先陣で、負けを喫した孫桓が、ここぞとばかり起死回生の道を進もうとしている。

敵陣に突撃を敢行しはじめた蜀の面々は、糜芳と士仁を目指している。それを遠目で見つめている賀斉は、敵が迫りくる前に陣容を固めている。

「いくぞ、糜芳が見えたぞ！」

「奴の首をとれ！」

戦場では、戦闘が始まった。

敵味方が乱れ会う中、乱戦が繰り広げられる。まず、張達が暴れまわった。そして、范疆が突撃してくる。

張飛は、両名の奮戦を確認しながら、獅子奮迅の戦いを繰り広げている。

「怯むな！ 下がるでない！」

自陣で、奮戦する孫桓が叫んでいる。

しかし呉の陣容は、作戦通りに撤退を開始する。その撤退の先には狙撃兵が伏兵として身構えている。

「どうやら自陣は押されて、退却を開始したようじゃ！」

「敵が退却に乗じて、深入りしてきた時が最大の好機よ！」

狙撃手をまとめている徐盛が、にやりと笑っている。

その呉の先陣で、死を覚悟していた士仁は、怯むことなく闘っていた。やがて、張飛に見つけられ、数合その刃を交えるが、残念にもその蛇矛を急所に受けてしまう。

「張飛様に討たれて、これで悔いはない！」

その場に、士仁は倒れ込んで、その命を終えようとしている。

「覚悟しろ、士仁！」

「ありがたき、幸せ。やっと、あの世へ行ける！」

士仁は涙ながらに、その首を張飛に任せた。そして、張飛は鬼の形相でその首を手に入れた。

「裏切り者、士仁の首を討ちとったぞ！」

蜀の軍隊は勢いづいている。その様子を見ていた糜芳は、恐れをなしたのか、一目散に逃げ去ろうとした。

「この場において、貴様はまたも逃げるのか！」

「士仁の奴とは、比べるのも馬鹿げている」

その怒りに、その場の冷静さを欠いた張飛が、その糜芳の首を取ろうと蛇矛を振りまわして突撃してゆく。

そして、張飛は糜芳に追いつき、蛇矛の餌食にしようとした。

「覚悟しろ！」

「貴様の首は俺様が頂いたぜ！」

一瞬であった。

糜芳の首は胴体から離れ、無様にも泥まみれになってしまった。それを見ている虞翻が呟いた。

「士仁の死に際と、糜芳の死に際には、雲泥の差がありますな！」

「そのようじゃの……」

徐盛が呟く。そして、敵陣への狙撃を銘じた。

「今が好機！」

「狙撃を開始するのは今ぞ！」

隠れていた狙撃兵が、敵をめがけて一斉にその強弓を放つ。

「しまった！」

張飛はその様子に気が付き、撤退を開始しようとした。そのとき、一本の矢が、その緯丈夫目掛けて突き進んでくる。

「ぐわっ！」

その矢は、張飛の肩口に命中する。

「張飛様を助ける！」

その声は、張達と范疆である。主である張飛の護衛をするべく、降りそそぐ矢に、その身を二人は任せている。

「この場合は、我らが引受けます。張飛様を後方へお連れしろ！」

張飛の部下が死に物狂いで、その命をつなごうとしている。

「すまぬ！」

張飛はその狙撃を交わし、どうにか命だけは繋ぐことができた。

「我らの大将を守ったぞ！」

そう言い残すと、張達と范疆は針鼠のように矢を受け、夷陵の激戦の地で命を終えることになる。

「奴らが、このわしを助けた！」

張飛は、その命の価値を惜しんでいた。肩に受けた矢じりには、呉の施しで毒が塗ってある。

張飛はその矢の意味を痛感している。

「わしの命も、これまでか！」

そう呟くと、劉備のいる夷陵に陣へと引き返して行く。命運は、張飛の存在に掛かっている。

二つの流れ星が舞い降りるのを、張飛はひしひしと感じ入る夷陵の一戦であった。

その戦場で、陸遜は今後の展望を考えている。

つづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9317n/>

張飛異聞伝

2011年12月28日02時51分発行